

「公印省略」

29農林試第711号の3  
平成29年6月30日

各関係機関団体の長 } 殿  
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長  
(福岡県病虫害防除所)

### 平成29年度病虫害発生予報第4号(7月)について

このことについて、病虫害発生予報第4号を発表したので送付します。

#### 予報第4号

### 茶の微小害虫の防除に努めましょう

本年度は春先の寒暖の差が大きかったため、カンザワハダニの孵化・生育が例年より遅く、適期よりも早い時期に防除した園が多かったようです。さらに4月下旬以降乾燥が続いたため、5～6月の予察調査では、カンザワハダニが非常に多発していました。

また、乾燥によりチャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマも増加傾向にあります。

山間地の二番茶や平坦地の三番茶については、萌芽から開葉期の防除に努めましょう。



葉裏に寄生しているカンザワハダニの成虫(円の中)  
※上方の黒い楕円形のはチャトゲコナジラミの幼虫

#### <予想される向こう1か月の天候(平成29年7月1日～平成29年7月30日)>

暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高いでしょう。

#### 向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並40 高50% 高い見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並見込み

(福岡管区气象台 平成29年6月29日発表抜粋)

7月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

### 主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	7月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	セジロウンカ トビイロウンカ	並 並	並 並	並 並
カンキツ	黒点病 ミカンハダニ	並 並	並 並	並 並
ナシ	黒星病 ナシヒメシンクイ	やや多 やや少	やや多 並	並 並
カキ	炭疽病 フジコナカイガラムシ	やや少 やや少	やや少 やや少	並 やや少
果樹共通	チャバネアオカメムシ	並	—	並
茶	炭疽病 チャノミドリヒメヨコバイ カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ チャトゲコナジラミ	少 やや少 多 やや少 少	やや少 並 多 並 やや少	並 やや多 多 多 やや少
冬春イチゴ (育苗期)	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	少 やや少 多	少 並 多	並 並 やや多

\*果樹共通・チャバネアオカメムシの平年比について、現況は年次変動が大きいため前年比としている

### 作物別発生予報

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、

**「少、やや少、並、やや多、多」の5段階**で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、**少発生（－）**、**やや少発生（－～±）**、**並発生（±）**、**やや多発生（±～＋）**、**多発生（＋）**として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

#### 【普通作物：水稲】

##### 1 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半月調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

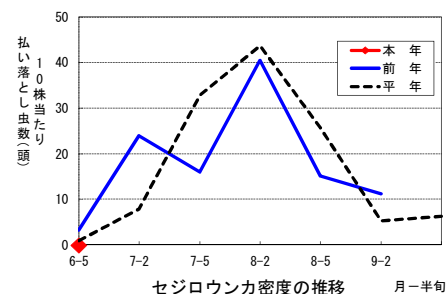
10株当たり成幼虫数0頭（平年0.93頭、前年3.3頭）

\*調査外のは場で6月9日に初飛来を確認している。

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 飛来成虫が多い場合、産卵部位の褐変や次世代幼虫の吸汁害により、イネの初期生育が抑制されるので、箱施薬剤を施用していないほ場では、今後の飛来状況に十分注意する。



## 2 トビイロウンカ

### (1) 予報の内容

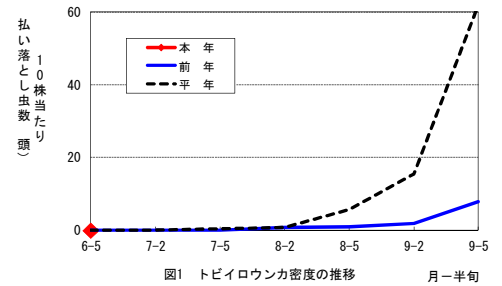
発生量：平年・前年並

### (2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。10株当たり成幼虫数0頭(平年0.01頭、前年0頭)
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

### (3) 防除上の注意

- ア 今後の飛来状況や7月中旬以降の飛来後第1世代幼虫の発生状況に注意する。
- イ 箱施薬剤が施用されていないほ場や、箱施薬剤の効果低下が心配される早植えほ場では、発生状況に注意する。
- ウ ほ場内では集中的に生息するので、ほ場全体での発生状況を確認する。



## 【果樹：かんきつ】

### 1 黒点病

#### (1) 予報の内容

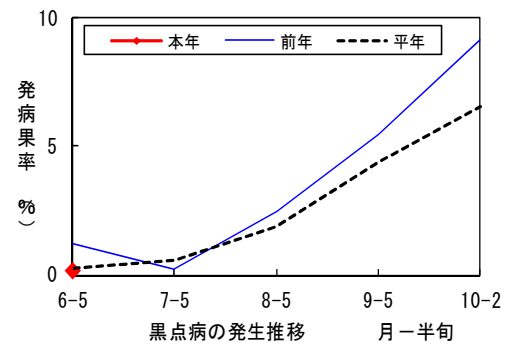
発生量：平年・前年並

#### (2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。発病果率 0.2% (平年 0.3%、前年 1.2%)  
発生ほ場率 9.1% (平年 8.8%、前年 18.2%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

#### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。
- イ 梅雨時期は、前回防除後の積算降雨量や散布間隔に応じた適期防除を行う。
- ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 9の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



## 2 ミカンハダニ

### (1) 予報の内容

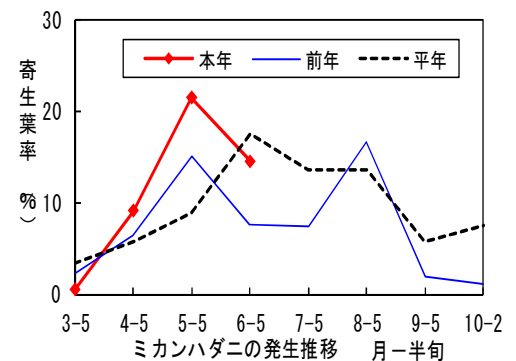
発生量：平年・前年並

### (2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。寄生葉率 14.6% (平年 17.6%、前年 7.7%)  
発生ほ場率 72.7% (平年 56.0%、前年 36.4%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。
- イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



## 【果樹：なし】

### 1 黒星病

#### (1) 予報の内容

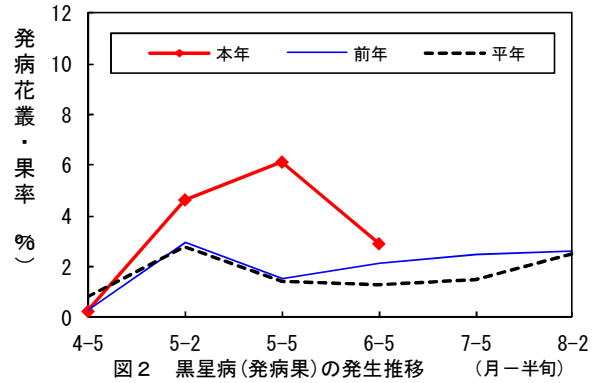
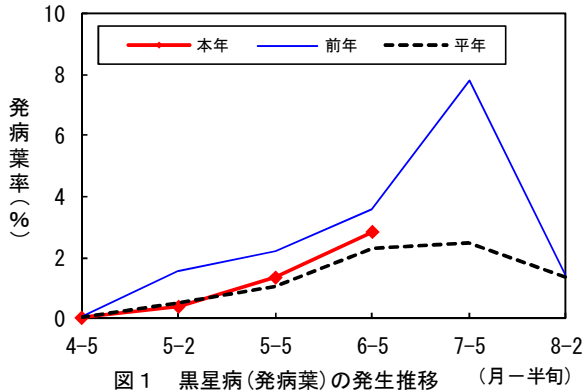
発生量：平年よりやや多、前年並

#### (2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。発病葉率 2.9% (平年 2.3%、前年 3.6%)

発生ほ場率81.8% (平年 63.8%、前年 90.9%)  
 発病果率 2.9% (平年 1.3%、前年 2.1%)  
 発生ほ場率63.6% (平年 44.9%、前年 81.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。
- イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- ウ 薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、DMI剤の使用回数は年間で3回以内、QoI剤は2回以内にとどめる。これらの薬剤は、保護殺菌剤との混用により防除効果の維持と耐性菌の発生を遅らせることが期待できる。

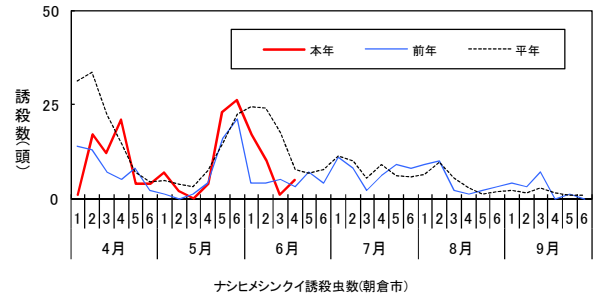
2 ナシヒメシクイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

第1世代成虫発生時期である5月4半旬～6月4半旬のフェロモントラップの誘殺虫数は、86頭(平年 118頭、前年 57頭)(地点名：朝倉市杷木町)で平年よりやや少なかった(ー～±)。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発蛾最盛期直後を目安に防除を行うが、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多くみられる場合は、1回目の防除の7～10日後に追加防除を行う。
- イ 幼虫は主に果頂部から食害侵入するので、防除にあたっては果実に薬液が十分かかるように散布する。
- ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。

【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

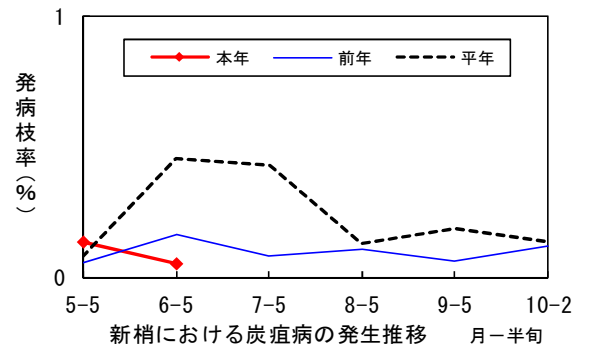
(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(ー～±)。

発病枝率 0.1% (平年 0.5%、前年 0.2%)

発生ほ場率 8.3% (平年 16.3%、前年 25.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

## 2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

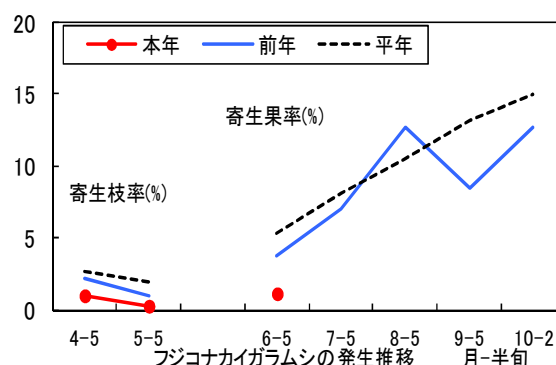
(2) 予報の根拠

ア 6月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかつた（－～±）。

寄生果率 1.1%（平年 5.3%、前年 3.8%）

発生ほ場率 58.3%（平年 67.7%、前年 75.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、混み合った枝を整理し散布むらがないよう丁寧に散布する。

イ 天敵への影響が比較的少ない薬剤で防除する。防除対策の詳細は、県ホームページに掲載している『病害虫・雑草防除の手引き』3防除方法の試験研究成果等 果樹 IVフジコナカイガラムシの発生生態と防除対策（p53）[http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/254826\\_52472279\\_misc.pdf](http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/254826_52472279_misc.pdf)を参照）。

### 【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年・前々年並

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの1㎡当たりの越冬量は平均0.9頭（前年0.8頭、前々年0.9頭）で、前年並であった（±）。

イ 6月1半月～4半月までのフェロモントラップによる誘殺虫数は、前年並であった（±）。

誘殺虫数 221頭（前年 197頭、前々年 238頭）（調査地点：筑紫野市）

25頭（前年 35頭、前々年 12頭）（調査地点：うきは市）

3頭（前年 13頭、前々年 36頭）（調査地点：八女市）

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 園内の発生状況の把握に努め発生に応じて防除を行う。

### 【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	現況 (発生量)	7月の発生予報 (発生量)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かんきつ かいよう病	やや少	やや少	やや少	・雨媒伝染をするため、風雨前の防除を徹底する。
なし ハダニ類	並	並	やや多	・多発すると防除が困難になるので、発生が少ない時期に徹底防除する。
かき ハマキムシ類	並	並	並	・ハマキムシ類幼虫は葉と葉が重なった部分や、ヘタと果実の間に多く潜んでいるため、薬剤はかかりムらがないよう十分量を丁寧に散布する。 ・ハマキムシ類の発生が多い園では、8月上旬～中旬の防除を徹底する。

## 【茶】

### 1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

1㎡当たり発病葉数 0.1葉(平年0.9葉、前年0.5葉)

発生ほ場率 20%(平年24.0%、前年50%)

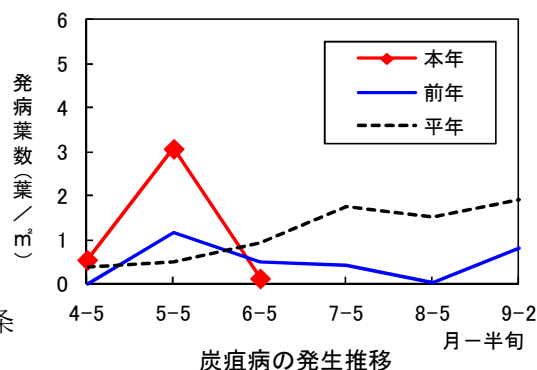
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±~+）。

(3) 防除上の注意

ア 摘採・整枝後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



### 2 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-~±）。

たたき落とし虫数 0.4頭(平年0.9頭、前年0.4頭)

発生ほ場率 40%(平年61.2%、前年77.8%)

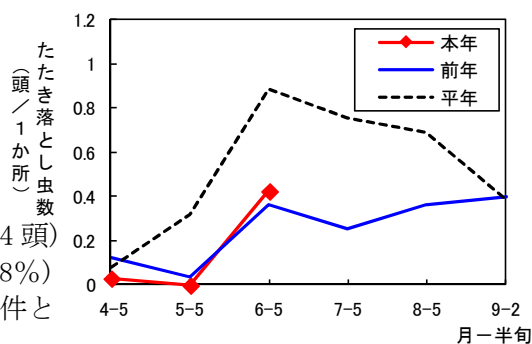
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±~+）。

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし（B5版上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

ウ 効果の高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。



チャノミドリヒメヨコバイの発生推移

※ 畝の雨落ち部4か所の枝をたたき、B5版上に落ちた虫の数を平均。

### 3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。

寄生葉率 34.8%(平年3.6%、前年2%)

50葉当たり虫数 49.5頭(平年6.7頭、前年3.9頭)

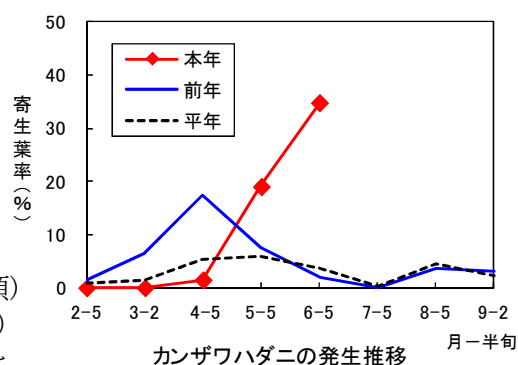
発生ほ場率 87.5%(平年24.1%、前年20%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±~+）。

(3) 防除上の注意

ア 多発している園では、チャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマの防除と併せて、速やかに防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



#### 4 チャノキイロアザミウマ

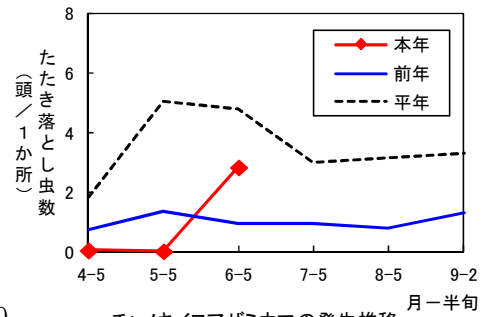
(1) 予報の内容  
発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。  
たたき落とし虫数 2.9頭(平年4.8頭、前年0.9頭)  
発生ほ場率 70%(平年77.7%、前年66.7%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

- ア 発生状況に留意し、たたき落とし（B5版上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



チャノキイロアザミウマの発生推移  
※ 畝の雨落ち部4か所の枝をたたき、B5版上に落ちた虫の数を平均。

#### 5 チャトゲコナジラミ

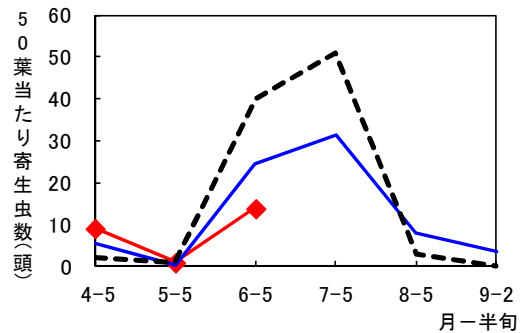
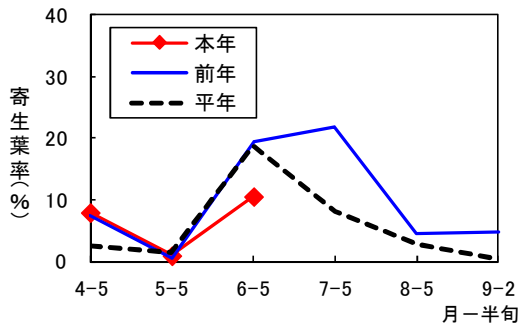
(1) 予報の内容  
発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。  
寄生葉率 10.6%(平年19.0%、前年19.4%)  
50葉当たり虫数 13.9頭(平年36.2頭、前年24.4頭)  
発生ほ場率 80%(平年73.0%、前年80%)

※ チャトゲコナジラミは、平成24年頃まで発生の地域差が非常に大きかったため、平年値は平成25～28年4カ年平均。

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



チャトゲコナジラミの発生推移

(3) 防除上の注意

- ア チャトゲコナジラミは年3～4回発生を繰り返す。防除適期は若齢幼虫発生期であり、親世代成虫の発生ピークが収まった頃である。直近の成虫（第1世代）発生ピークは、7月上～中旬と予想される。
- イ 第1世代成虫は越冬世代成虫に比べて数が少ないので、目視で園を飛翔する成虫の多寡を判断するのは困難である。黄色粘着板を設置すれば、成虫の付着数によって多寡を判断できる。
- ウ 幼虫は葉裏に寄生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。

【茶：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	現況 (発生量)	7月の発生予報 (発生量)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
茶 チャノコカク モンハマキ	並	やや少	やや多	<ul style="list-style-type: none"> <li>第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月下旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。</li> <li>巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。</li> </ul>
チャノホソガ	やや少	並	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月上～中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。</li> <li>巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。</li> </ul>

【野菜：イチゴ（育苗期）】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

発病株率 3.4%（平年 17.6%、前年 21.0%）

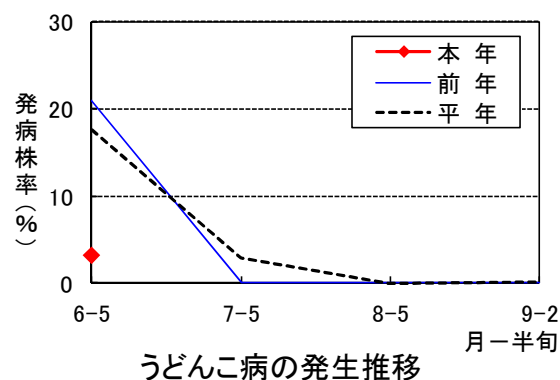
イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生条件となっている（-～±）。

(3) 防除上の注意

ア 親株は、速やかに育苗ほから撤去する。

イ 軟弱徒長にならないよう、苗の間隔を空け通風を図る。

ウ 発生した株については葉かきを強めに行い、伝染源である発病葉を取り除く。また、摘葉後には薬剤防除を徹底する。



2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少であった（-～±）。

発病株率 0%（平年 0.04% 前年 0.14%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

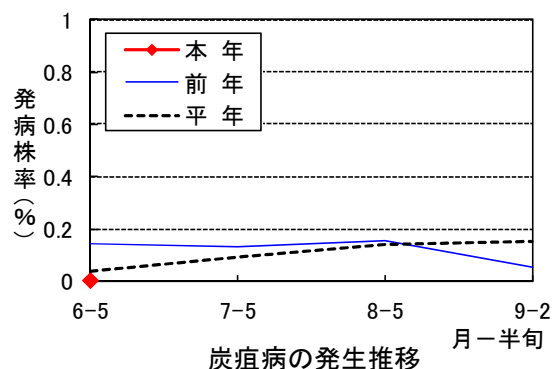
ア 親株は、速やかに育苗ほから撤去する。

イ 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に蔓延することがあるので、ほ場内での発生状況に注意し、発病苗及び周辺の苗は速やかに持ち出し処分する。

ウ 葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的な予防散布を徹底する

エ 雨よけ育苗等でも風通しが悪いと発病しやすいので、苗の間隔を空け通風を図る。

オ 窒素肥料を多用すると発病しやすいので、適正な肥培管理に努める。





### 3 ハダニ類

#### (1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年よりやや多

#### (2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

寄生株率 14.8% (平年 8.4% 前年 12.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

#### (3) 防除上の注意

ア 親株は、速やかに育苗ほから撤去する。

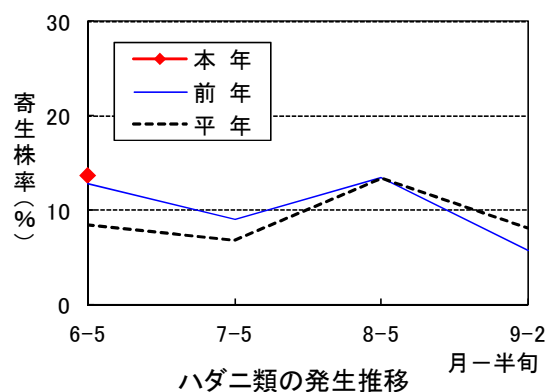
イ 葉かきを強めに行い、寄生葉を取り除くよう努め

る。なお、摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し処分する。

ウ ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

エ 多発後の防除は効果が不安定になるので、異なる系統の薬剤で定期的な防除を徹底する。

オ 土着天敵を活用するため、天敵への影響が大きい有機リン系薬剤や合成ピレスロイド系薬剤を多用することは避ける。



## 農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等に関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

### 1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

### 2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬(剤型)や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

### 3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

### 4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

### 5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

### 6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。  
携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



最新の情報発生状況